

<書評論文>

テレビ・オーディエンスの能動性

Roger Dickinson, Rawaswami Harindranath
and Olga Linne(eds.),

Approaches to Audiences : A Reader. (London, Arnold, 1998)

鍵 本 優

はじめに

私たちはテレビを観るとき、何を、どのような仕方で見ていると言えるのだろうか。このような問いをあらためて立てることから出発するとき、近年特に80年代以降盛んになってきた、オーディエンス研究と呼ばれる主にマス・メディアの受け手を対象とする研究を無視するわけにはいかないだろう。なかでもテレビについての研究はこのオーディエンス研究においても主流であり、議論の蓄積も非常に多く、また私たちの日常生活にも深く関わるものである。したがって、それは単にメディアだけでなく文化一般を考えるうえでも重要な切り口の1つになりうるだろう。代表的研究としては、BBC 時事特集番組の分析を通じてテレビの多意味性とオーディエンスによる解釈の重要性と多様性を理論的な抽象ではなく実証的な方法によって示した、D. モーリーの『「ネーションワイド」・オーディエンス』（1980）がある。

本書はそのオーディエンス研究の論文集である。オーディエンス研究の明確な定義づけは難しく、本書に収められた諸論文は1つの視点からまとめられていると言うよりも、むしろ執筆者の研究分野の多様性からさまざまに分かれていると言える。またオーディエンスの概念自体も社会全体や家族、コミュニティ、読者や視聴者、消費者といった非常に広い意味で捉えられている。編者によれば本書の目的の1つは多様なオーディエンス研究の現状をそのまま示すことにあり、本書には次のような議論が収められている。A. ブラウンはクリケットの歴史を取りあげ、メディアが引き起こした審判や観客の在り方やルールの変容とそれをめぐる社会的状況の変質を描き出している。R. ディキンソンはテレビと食事の選択との関係性を論じている。T. リーブスは自分が見たテレビドラマの内容を他

人に説明する際に、話の焦点がストーリー、登場人物の心理、経済的状况など文化によって全く変わってしまうという実験結果を示している。またR. シルバーストーンはテレビと日常生活の関係づけにおける実践的・概念的的方法論の問題を議論している。D. ケルナーはA. グラムシやフランクフルト学派の議論を検討しながらテレビの批判理論を目指している。B. ホイヤーは社会心理学的観点からテレビの受容分析を捉え返している。本書にはこれらを含めた24本の論文が収められ、大まかに社会・個人・文化それぞれの視点から3つのセクションに分けられている。

しかし本書の内容全部を伝えることはとてもできない。したがって、論点を明確にするためにも、研究の支柱の1つであるオーディエンスの能動性に関する議論を扱うことにしたい。大雑把に単純化してしまえば、それはこれまでメディアによって送られるメッセージをただ受け取るだけの存在とされていた受動的なオーディエンス像のなかに、メディアによって提示されているテキストに対して何らかの能動的で（主に解釈上の）多様な関与を行うオーディエンス像を見いだそうという議論である。そこではオーディエンスを構成している諸個人が同じメッセージを多様に受け取っているということが議論され、研究の焦点はその差異を作り上げているのが何かということに置かれる。この多様な解釈を可能にさせているのは、オーディエンスがメッセージを受け取り、解釈する際の能動性（activity）である。以上がこの議論の大まかな輪郭である。

しかし実際にはオーディエンスの能動性自体についても明確に定義づけるのは難しい。ここではその能動性の理論的意味を辿る軸として、C. V. フェイリッツェンの「メディア・バイオレンス—4つのパースペクティブ」、D. バッキンガムの「子供とテレビ—研究の批判的展望」、J. フィスクの「テレビジョン—多意味性とポピュラリティ」の3つを取りあげたい。これらはオーディエンスの能動性をめぐる基本的な議論を辿っていく軸として有効であるばかりでなく、オーディエンス研究の現在地を明確に示している。

1. メディア・バイオレンスにおけるオーディエンスの能動性

フェイリッツェンは「メディア・バイオレンス—4つのパースペクティブ」において、テレビや映画などの恐怖・暴力シーンを観ることを捉える4つのパースペクティブについて述べているが、その1つがオーディエンスの能動性というパースペクティブである。彼女はオーディエンスがメディア・バイオレンスを選択するいわば「動機」に注目し、それをメディアの支配的イデオロギーに対する抵抗的な個人主義的選択として描き出している。と同時に、個人を取り囲んでいる環境の方がメディア自身よりもしばしば本質的であるとして、この抵抗性は社会的要因にも従っているとも述べる。

つまりフェイリッツェンの議論は、メディア・バイオレンスを選択させているのが映像自体の魅力だというよりも、むしろオーディエンス側で内面化された暴力シーンに対する精神態度だということである。

このことについて彼女は3つの仮説を挙げているが、はじめの2つは自分の感情をコントロールするために暴力シーンを観るという心理的な動機の点を強調しており、社会への抵抗はどちらかといえば消極的である。しかしこれは暴力シーンに限ったことではなく、心理的な構造としては、退屈だからこそ刺激的な番組を観るということと全く同じである。

しかし個人的要因に偏り過ぎている仮説だけでは現実の受容状況をうまく説明できない。そこでフェイリッツェンは社会的要因にも目を配った第3の仮説を挙げる。それは、オーディエンス自身がおかれている社会-文化的状況がメディアの利用に関係しているというものである。それによれば、社会-文化的状況に取り込まれたオーディエンス諸個人の文化的実践 (cultural practices) は、メディアや家族や学校などにおける支配的イデオロギーに対して、いわば解放するような形で抵抗を示すことにもなりうるという。

フェイリッツェンはこれを具体的事例を挙げて説明している。15-6才の少年達に行ったメディア・バイオレンスについてのインタビューは、暴力シーンを観ることが周囲の仲間達に自分の強さを誇示できる、いわば「男らしさ」をはかる方法でもあることを示していた。もちろんこれはあくまでシンボリックなレベルである。また、「男らしさ」の表明は同じように音楽やコンピューター・ゲームについても見いだすことができ、それらは大人や「主流」の青年達からすれば理解しにくいものであった。

このように、既存の「男性的」文化に限定されてはいるが、フェイリッツェンは次のようにオーディエンスの能動性を結論づけている。それはメディア・バイオレンスの受容が単なる刺激の受容ではなく、積極的に周りの人間や社会と関わる中でアイデンティティを求め確立させる行為だということである。それは主に支配的イデオロギーに対するシンボリックなレベルでの抵抗という形をとっていた。

2. 3つの研究史からみたオーディエンスの能動性について

バッキンガムの「子供とテレビー研究の批判的展望」は、従来受動的なだけの無力なテレビ視聴者とされていた子供が実は能動的な視聴者であったことを研究史に即しながら示している。彼はオーディエンスの能動性について、その概念が幾分レトリカルでしばしば曖昧なまま使われてきたと指摘したうえで、この観点からすればテレビはオーディエンスによって構築されると述べる。ここでは「利用と満足研究」、構築主義的研究、カルチュラル・スタディーズという3つに即して議論が展開されているので、以下ではこれらの素描からオーディエンスの能動性がどう捉えられてきたかを概観したい。

メディアの「利用と満足研究」とはテレビなどのメディアがオーディエンスの性別や年齢、社会階級などに応じて利用され、受容されることに焦点を当てた研究である。具体的な研究成果も多く、オーディエンスの能動性を論じているとも言えるのだが、選択や解釈における能動性はどちらかと言えば

消極的であるので、それだけでは議論が発展しにくいものであった。

構築主義的研究では、テレビの果たす役割や刺激への反応よりも、情報を捉えて意識的に解釈するプロセス自体に焦点が置かれる。バッキンガムは物語理解の研究や認知発達論などをはじめとするいくつかの研究を挙げている。ここでは、その中でもテレビ・オーディエンスが一体何を見ているのかということを対象としている注意と理解の研究を取りあげる。

一般的にテレビを観ることとは、テレビの情報（映像や音声など）に注意を向け、そのあとでそれが何であるのかを理解するという形で考えられている。バッキンガムはD. アンダーソンの議論を援用し、「理解が注意から自動的に生まれるものではなく、むしろ注意は部分的には理解のプロセスによって決定されている」（p.138）ということに注目する。つまりまず何を観ているのかを理解しようという意図がオーディエンス側にあり、テレビに対する注意がその理解のために意図的に、能動的に向けられているというのである。それはテレビへの注意が刺激に対する一種の反応にすぎないという考えに反論するものであった。

こういったテレビの情報を意味づける際には、テレビ視聴の経験と日常生活の経験から作り上げられる認識の枠組みであるシェーマ（schema）がいわば無意識のうちに用いられているとされる。テレビの解釈や意味付けはテレビ側にあるのではなくオーディエンス側にあり、オーディエンスはシェーマに基づいてテレビを解釈する。意味の受け手とは意味の解釈者に他ならず、シェーマによるとはいえ自発的な解釈を行うという意味ではオーディエンスの能動性が見いだされる。しかしこの研究ではテレビそのものとテレビの意味が確立する社会的プロセスが無視されやすい。バッキンガムはこのことを議論するものとして、カルチュラル・スタディーズにおける近年のテレビ・オーディエンス研究を挙げる。

カルチュラル・スタディーズにおいてはオーディエンスがより社会的に構成されたものとされ、内的に統一した個人として扱われるのではなく、多様な社会的位置や経験から生じる多様な言説の交錯するポイントとして扱われる。そして意味の生産はそのポイントにおける社会的交渉の複雑なプロセスの結果として捉えられ、かつその捉え方は能動的オーディエンス理論の限界を越えていくものだと考えられている。バッキンガムはこのようにカルチュラル・スタディーズのオーディエンス像を述べているが、それは今まで考えられてきたようなオーディエンスの捉え方を大幅に組み替えるものである。そのため、また別のパースペクティブが必要であり、この議論をオーディエンスの能動性という側面だけから論じるのは非常に困難であるだろう。そこで次では、テレビというテキストの側からアプローチしている議論を紹介することにしたい。

3. テレビの多意味性と抵抗としての能動性

フィスクは「テレビジョン—多意味性とポピュラリティ」においてテレビの多意味性が発生する

ロセスを考察し、そこでオーディエンスの果たしている役割を読みとることでその能動性を浮かび上がらせている。

フィスクの理論的立場は、テレビの様々な解釈を単なる社会的多様性でなく、支配的なイデオロギーによる解釈との権力関係として理解することを強調する。そこでは解釈の多様性が権力的闘争や抵抗の結果であって、はじめから存在するものではないとされる。オーディエンスの能動性は主にテレビにおける支配的解釈に対する抵抗として見いだされる。

フィスクによれば、階級構造を持つ社会ではテレビの多意味性によるポピュラリティこそが必要とされている。支配的な文化に対してサブカルチャーは多様であり、ポピュラーであることとはすなわち多様な文化に受容されることである。ではテレビの多様性はどこから生じるのだろうか。フィスクによれば、テレビにおける支配的な解釈こそが多様な対抗的解釈を生み出すのである。したがって彼の分析の中心は、支配的な解釈を生み出しながらも多意味的な解釈を可能にしているテレビというテクストの性格がどのようなものであるか、ということに置かれる。

フィスクはテレビのテクスト的性格を分析するために、J. エリスとU. エーコの議論を援用する。エリスによれば、テレビの性格を定義づけているのはテキストの分節化（segmentation）である。テレビの意味は諸分節の論理的な繋がりによってではなく、連想・連合（association）によって繋がっているのである。またエーコによれば、テキストの分節化にその連合・連想の構造が伴えば、物語の進行や因果関係に基づくテキストよりも広く多様な解釈を可能にする「開かれたテキスト」が生み出されやすい。

このような「開かれたテキスト」としてのテレビがイデオロギー的に矛盾する多様な解釈を可能にしていくプロセスを考察するために、フィスクは次に「記号の過剰（semiotic excess）」という概念を取り扱う。この「記号の過剰」は、提示された支配的なイデオロギーによる解釈に従わない、対抗的立場に有利な解釈におけるいわば過剰な意味として生み出される。支配的、対抗的といった立場の違いとは、この場合テレビの制作者とオーディエンスとの社会・文化的状況の違いから生じている。例えば、テレビの探偵物での支配的立場が対抗的立場を打ち負かすストーリーは、それ自身社会的な対抗的立場を生み出すシステムの一部にもなっている。テレビにおける支配的立場はこのような矛盾を抱えやすいのである。

このように、解釈の多様性はテキストとオーディエンスとの相互作用から生じる。そしてこの場合、相互作用におけるオーディエンス側からの抵抗とテキストの多意味性は同じことを言い換えたものであると考えられるだろう。

おわりに

以上、オーディエンスの能動性をめぐって3人の議論を取りあげた。能動性を生み出す要因をもとに整理すれば次のようになるだろう。フェイリッツェンはメディア・バイオレンスについて論じ、能動性の議論を「社会-文化的状況」に取り込まれているオーディエンスに焦点を当てて展開している。バッキンガムは包括的な子供とテレビの研究史に即しながら、能動性の議論をシェーマなどの「認知的要因」に焦点を当てて展開している。本書ではホイヤーも同様の議論を展開している。またフェイリッツェンとは逆に、フィスクはテレビの「テキスト性」に焦点を当てることでオーディエンスの能動性を浮かび上がらせている。

このようにオーディエンスの能動性ひとつをとっても、本書は多様な研究の現状をかなり詳細に紹介し、同時にこれからの課題や方向性も提示している。各々にはもちろん批判もあるだろうが、とりあえずこれらの議論から浮かび上がるのは、オーディエンスの能動性とはテレビからの刺激や情報を受容したうえで、自らの認識の枠組みに即した解釈を行うこと、いってみればもうひとつの受容形態を生み出すことである。もちろんこれは社会-文化的状況に基づく、支配的イデオロギーへの抵抗とは限らない。解釈における能動性それ自体も支配的イデオロギーに巻き込まれる要因になりうる。一方で、社会-文化的状況から全く自由な解釈もあり得ない。本稿では十分に扱えなかったが、このことを考察するのなら、すでに見たようにオーディエンスの能動性というバースペクティブでは扱えない議論も視野に入れていく必要があるだろう。しかしこのことは決してオーディエンスの能動性について考える必要がなくなったことを意味しない。理論的な批判は当然考慮するとしても、少なくとも私たちの日常生活に具体的に関わってくるような研究やメディアの技術の側に焦点を置くM. マクルーハンのメディア論に接続させてゆけるような研究においては、このバースペクティブの果たす役割が非常に大きいと考えられる。

もちろんこのことは3つの論文だけで終わるものではない。実際には最初に述べたモーリーの研究やその他の代表的研究においても基本的な枠組み自体は全く同じである。問題はオーディエンスの能動性が発生する複雑で入り組んだプロセスをどう解明し説明づけるかであり、本書の3人の議論はその方向性を適切に示していると言えるだろう。たしかにモーリーの研究は諸個人によるテレビ解釈が複雑で予測できないプロセスであることを実証した。しかしフィスクとハートレー(1991)も述べるとおり、テレビを観る状況の多くが家庭内であることを考えても、テレビ・オーディエンスは完全な共同体にも、あるいは完全な諸個人にも還元できないのである。上に述べたような社会的プロセス自体はまだまだ明らかではないが、このことは決して本書の不備ではなく、オーディエンス研究そのものの課題であるだろう。

参考文献

- J. フィスク, J. ハートレー著 池村六郎訳『テレビをく読む』、未来社、1991
日本マス・コミュニケーション学会編『マス・コミュニケーション研究』53号、1998
G. ターナー著 溝上由紀ほか訳『カルチュラル・スタディーズ入門』、作品社、1999

(かぎもと ゆう・修士課程)